

1年次の実践・研究の成果と課題

研究委員長 稲垣 勇介

自律した学習者が育つ授業デザイン

今年度から始まる実践・研究では、目の前の子どもの自律の具体的な姿を見いだすことと、自律的に学ぶことにつながる授業デザインの具体化に取り組んでいく。どのような姿が自律なのかを、一般的な意味定義だけでなく、様々な場面で具体的に見取り、価値付けていく。また、自律的に学ぶ子どもの姿が見られたとき、それを支えていた授業デザインの要件について、仮説生成をしていく。この実践・研究を通して、学校教育目標である「自律」の達成を目指す。

重点 子どもが問題解決に没頭する単元開発

研究1年次である今年度は、「問題解決に没頭する」ことを目指し、その定義として「さらなる満足感（よりよい解決）の追求」「自分のもつ力の模索」「意図的な試行」の状態を見いだした。しかし、一見、学習にのめり込んでいるような状態でも、目の前の活動にただ「集中」しているだけの可能性もある。「問題解決への没頭」状態と「集中」状態とでは、教師の対応の仕方が変わってくる。教師としての次の一手を適切に判断するためにも、2つの状態を区別して見取ることを意識して研究を続けてきた。

ここでは各教科等部の実践から生成した仮説から1年次の成果や課題について述べる。

1 成果

(1) 解決したくなる困難さの問題が生じるような、人との交流や学習材の準備などの、場の設定や環境整備

意思疎通するツールが英語しかない相手との交流、多様な概念が存在する「大きさ」を比べることのできる様々な素材の準備、多様な表現方法をその方法が生み出す形や色の効果を実感しながら試すことができる時間などの授業デザインが要因として、以下の姿があらわれたと考えられる。

【更なる満足感の追求】

- ・ どの本が主人公の心を動かすかに重点を置き、彼への願いを語りながら自分の在り方を見つめ直した姿（国語）
- ・ アリーナを使って活動したい集団が自分の好きなことを満足に行うために、互いに呼び掛けたりやり取りをしたりして、児童同士が関わり合いを求めた姿（総合）

【力の模索】

- ・ 自分が伝えたいことが伝わるように、困ったときに周囲に助けを求めたり、手元にあるものを使ったりしながら、その場にある、自分もてる力を総動員して英語でコミュニケーションを図った姿（外国語）
- ・ 自分の決めた視点で大きさ比べをし、生活経験から感覚的に捉えている量の概念では課題解決が難しいと感じ、他者と共に解決しようとする姿（算数）



【意図的試行】

- ・他の児童の役割演技を自分の役割演技と比較して、なぜ違う動きをしているのかを考えている姿（国語）
- ・表現方法を試す過程で造形的な気づきを獲得し、その後の表現を発展させた姿（図工）

(2) 自分事の問題意識をもって自ら動き出すような、他者から刺激が得られるグルーピングや外部指導者の活用

地震災害への理解だけでなく、課題の明確化にもつながる、防災に取り組む人や被災者の思いを知れる資料の精選、目指す表現の方向性の自覚につながる、技能的に手が届きそうな中学生ゲストティーチャーの採用、自分と考えが似ている人同士での活動になるような意図的グルーピングなどの授業デザインが要因として、以下の姿があらわれたと考えられる。

【更なる満足感の追求】

- ・強弱や音の重なり、反復と変化といった音楽の特徴に着目しながら、自分たちの思いを重ねて表現しようとする姿（音楽）

【力の模索】

- ・自分も含め、地震災害から家族や友達の命が助かるためにはどうしたらよいのかという切実感のある課題をもって活動する姿（社会）



【意図的試行】

- ・友達との関わりを通して友達の考えの中から、よりよい考えを求め取捨選択し、試行錯誤を繰り返す姿（理科）

(3) 問題解決に向けて、したいことやすべきことが取り組みやすくなるような、子どもの言葉での共通言語化・見える化などの共有の工夫

一般的な知識ではなく子どもたちがよいと感じたものからその共通点を見いだしたり、子どもから出てきた馴染みのある言葉のまま共有したりして共通理解を図ることや、子どもがつながり協働して解決していけるような、活動する際の互いの立場や課題、相互評価を可視化するカードや掲示物を整えることなどの授業デザインが要因として、以下の姿があらわれたと考えられる。

【更なる満足感の追求】

- ・十七音で自分の気持ちを伝えるために、よりよい言葉はないか表現を吟味する姿（国語）
- ・運動経験の差に関係なく、チーム全体が動きのイメージを共有し、ボールをゴールまでつなげるために考えて動こうとする姿（体育）

【力の模索】

- ・話に登場する多様な人物の立場から、よりよい関わり方を模索する姿（道徳）

【意図的試行】

- ・自由に活動する中で直面した個別の課題を解決しようと、友達とつながりながら試行錯誤した姿（生活）



(4) 問題解決に対する、自身の思い・目的・思考・表現を自覚できるような、声掛け・問い掛け・働き掛け

子どもがその活動を選んだ理由やその活動によりどのような困難が解決しそうなのかを問い掛けることによる自己理解につながる問答をしたり、子どもが表そうとしていることに対する共感的な、あるいは揺さぶる言葉掛けをし、その活動への価値付けや自己内対話の推奨をしたりするなどの授業デザインが要因として、以下の姿があらわれたと考えられる。

【更なる満足感の追求】

- ・自分が想像したことや表現の仕方に自信をもった姿（図工）
- ・言葉に潜む心情に思いを巡らせ、道徳的価値に対する理解を高めていった姿（道徳）
- ・活動過程を振り返り、取組の中にあつた学びの要素を活動に意味付け、変容していった姿（総合）



2 課題

問題解決への没頭を見取るための深い教材研究

1年次の実践・研究を通して、問題解決に没頭する子どもの学びが豊かに変容していくような直感的・即興的対応や、問題解決への没頭を実現するための軌道修正が課題として挙げられた。これは、問題解決に没頭しているはずの子どもを取りこぼしたり、没頭から変容する可能性を見逃したりするなど、教師の見取りの甘さが起因していると考えられる。これを解決するには、単元開発の際の教材研究を更に深めていくことが必要である。授業中の臨機応変な対応力を教師のセンスという言葉で片付けてしまっただけではいけない。まずは、見取る対象児一人ひとりの背景を解釈した上で没頭する姿、ねらいの達成にとって都合の悪い姿について多様に想定することから始める。そして、その姿から可能性を広げたり、没頭へと促したりする対応を構想していく。深い教材研究とはこのことである。これにより、問題解決への没頭についての感度が高まり、見取りと指導がつながることで臨機応変な対応が可能になっていくと考える。そして、教師のセンスは磨かれていくことであろう。